

郡家町文化財調査報告書 第21集

鳥取県八頭郡郡家町別府

# 下毛山古墳群発掘調査報告書

1998.3

郡家町教育委員会

## 序 文

郡家町は、八頭郡内においては、原始・歴史時代の遺跡の多さには抜きんでている歴史豊かな風土と自然に恵まれた環境にあります。しかし、近年における各種開発事業の増加にともない、我々の生活環境も大きく変貌しつつあることも見逃せない事実であります。このような状況のもとで、我々のルーツともいえる先人の残した文化遺産としての埋蔵文化財も大きく影響を受けています。しかし、開発と文化財の共存を図るべく極力調整することによって、これを後世に残し伝えることが我々国民の責務であると考えます。

今回、報告することとなった下モ山古墳群は、関係各位との協議・調整を行った結果、記録保存という形で残すことによりその趣旨に沿う事にしたものです。また、この発掘調査を行うにあたり、地元別府地区をはじめ、借しきみない援助とご協力を頂いた関係者各位にたいして厚く御礼申し上げます。

なお、ささやかな冊子ではありますが、本書が町民の郷土研究の一助として活用され、埋蔵文化財の保護、意識の高揚に役立てて頂ければ幸いです。

平成10年3月

郡家町教育委員会

教育長 森 本 實 二

## 例　　言

1. 本書は、鳥取県八頭郡郡家町大字別府字下モ山に所在する下モ山1・2号墳の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、1997年10月6日から12月10日まで現地作業を行い、以降1998年3月まで整理作業を行った。
3. 本書に使用した方位は、第1・2図を除き全て磁北を示す。
4. 本書に使用した挿図の墨書きは、中野の指導の下、谷本直哉がこれに当たった。
5. 本書の執筆・編集は、中野知照が行った。
6. 発掘調査により作成された記録類・出土遺物は、郡家町教育委員会に保管している。

## 調査関係者一覧

調査委託者	有限会社 松田組
調査主体	郡家町教育委員会
教育長	森本 實二
社会教育次長	丸山 勉
社会教育係長	谷本 清通
調査指導	鳥取県埋蔵文化財センター
調査主任	郡家町教育委員会委嘱調査員 中野 知照
作業協力者	大野 昌之、大野 美佐栄、谷本 直哉、田渕 美道、福本 司、 福本 弘江、郡家町教育委員会事務局職員

## 本文目次

第1章	調査に至る経過	1
第2章	位置と環境	2
第3章	調査の概要	5
第1節	検出した遺構	5
1.	下モ山1号墳	5
2.	下モ山2号墳	11
第4章	まとめにかえて	15

## 挿図目次

第1図 下モ山古墳群位置図	1
第2図 那家町北東部遺跡分布図	3
第3図 下モ山1号墳、墳丘遺存図	6
第4図 下モ山1・2号墳、遺構配置図	7・8
第5図 下モ山1・2号墳、墳丘断面図	9
第6図 下モ山1号墳、第1主体遺構図	10
第7図 下モ山1・2号墳、出土遺物実測図	12
第8図 下モ山2号墳、墳丘遺存図	13
第9図 下モ山2号墳、第1主体遺構図	14

## 図版目次

図版1 1・2号墳出土遺物

図版2 下モ山古墳群

- |                  |                  |
|------------------|------------------|
| (1) 調査地遠景        | (2) 試掘調査風景       |
| (3) 1号墳、遺構面検出状態  | (4) 1号墳、遺構面検出状態  |
| (5) 2号墳、溝状遺構検出状態 | (6) 1号墳、調査前全景    |
| (7) 2号墳、調査前全景    | (8) 1・2号墳、表土除去状態 |

図版3 下モ山1号墳

- |                    |                  |
|--------------------|------------------|
| (1) 第1主体検出状態       | (2) 第1主体、標石検出状態  |
| (3) 第1主体、西側小口部検出状態 | (4) 墳丘北側テラス検出状態  |
| (5) 墳丘東側テラス検出状態    | (6) 墳丘東側テラス検出状態  |
| (7) 墳丘北側テラス検出状態    | (8) 墳丘北東側テラス検出状態 |

図版4 下モ山2号墳

- |                    |                     |
|--------------------|---------------------|
| (1) 第1主体検出状態       | (2) 第1主体遺構面検出状態     |
| (3) 第1主体、埋土土層断面    | (4) 第1主体、埋土土層断面     |
| (5) 第1主体南側、埋土土層断面  | (6) 第1主体北側、埋土土層断面   |
| (7) 第1主体、南側小口部検出状態 | (8) 第1主体、南西側小口部検出状態 |

図版5 下モ山2号墳

- |                 |                  |
|-----------------|------------------|
| (1) 墳丘東側テラス検出状態 | (2) 墳丘東側テラス検出状態  |
| (3) 墳丘南側、周溝検出状態 | (4) 周溝・墳丘基底部検出状態 |

図版6 下モ山2号墳

〔1〕墳丘遺存状態

〔2〕墳頂部遺存状態

図版7 下モ山1号墳

〔1〕墳丘遺存状態

〔2〕第1主体検出状態

図版8 下モ山1・2号墳

〔1〕1・2号墳全景

〔2〕2号墳、第1主体検出状態

図版9 下モ山1・2号墳

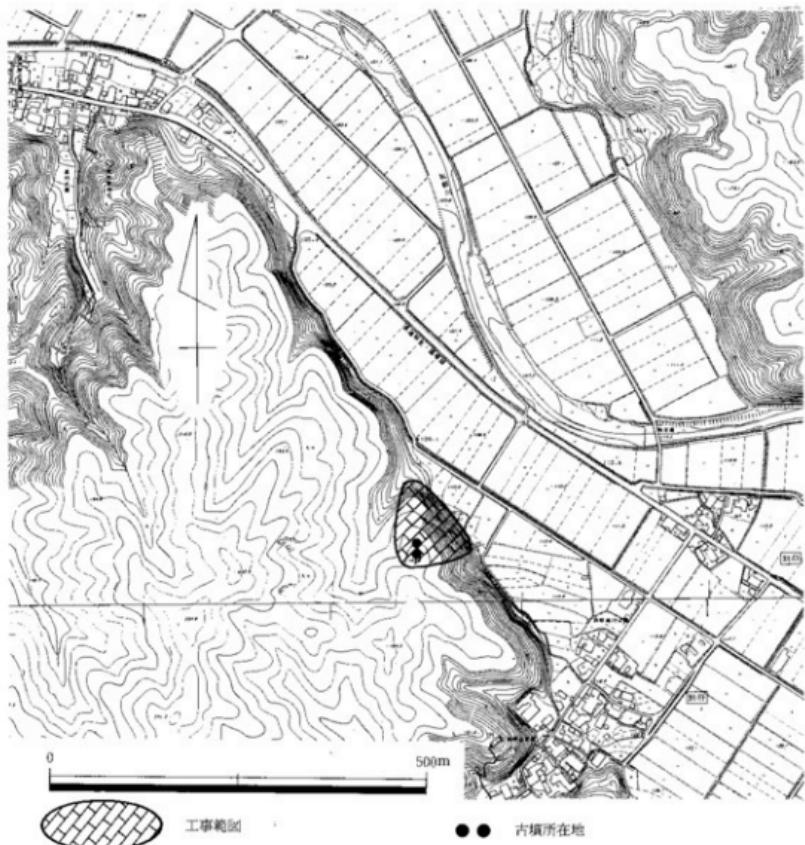
〔1〕1・2号墳、調査後全景

〔2〕2号墳、周溝全景

## 第1章 調査に至る経過

郡家町の北東部、私都川の中流域は、下流の肥沃な水田地帯に連続して位置する地域である。私都川流域の平地や丘陵地には、先人の残した多くの遺跡が点在しているが、近年各種開発事業により、僅かづつその景観を変貌しつつある。

下モ山古墳群の所在する別府地区においても、1997年に字下モ山において丘陵先端部の土砂採取計画を知ることとなった。この計画を受けて郡家町教育委員会では、現地踏査を



第1図 下モ山古墳群位置図

実施するとともに、関係各機関と協議を行った。現地踏査により、当該地区内において古墳状の高まりとそれに連続した平坦面を確認した。

関係各機関との協議の結果、現状での保護保全が困難なため、当初予想された古墳1基と連続した平坦面について発掘調査を実施することとなった。発掘調査は、郡家町教育委員会が調査主体となり、有限会社松田組の委託を受けて実施した。

調査は、1997年8月5・6日に試掘調査を実施し、同年10月6日より現地調査を開始し12月10日に現地での作業を終了した。その後、1998年1月10日より3月31日までの期間に整理作業を行った。

現地での抜開・地形測量の段階では、調査対象地が比較的細い丘陵の尾根上に位置していたため、明確な墳丘を為していなかった。しかし、調査を進めるうち若干の盛土が見られるものの地山整形のみで作られた台状墓であることが知られた。今回の調査では、土器類が検出されなかったため、台状墓の築造年代を推定することは出来なかったが、概ね弥生時代終末期から古墳時代初頭にかけてに営まれたものと思われる。

今回調査を実施した当該地の尾根の上方においても、同様の平坦地が認められるため、今後の開発に際しては注意が必要である。

調査にあたり、関係各機関、町民各位の文化財保護に対する理解と協力・指導・助言を頂いた。記して感謝したい。

## 第2章 位置と環境

### 地理的環境

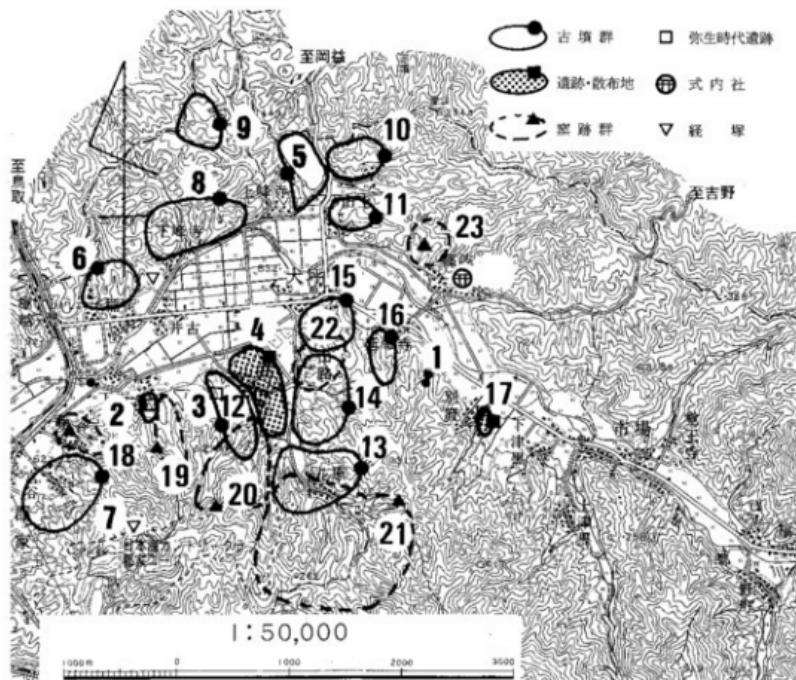
下モ山古墳群は、鳥取県八頭郡郡家町大字別府字下モ山に所在し、JR郡家駅の北東約4.5kmの地点に位置する。

郡家町は、鳥取県東部の最大河川である千代川に流入する八束川と私都川に挟まれた流域に立地する。本町の北側は鳥取市と国府町に接し、西側は河原町、南側は船岡町と八束町、東側は兵庫県が隣接する。本町の東端は、私都川が源を発する扇ノ山を擁している。

下モ山古墳群は、この私都川流域に所在している。私都川は、一旦、北西に流下したのち南西にその流れを変え、八束川に合流して千代川に流れこんでいる。私都川は、本町の中央部で北西から南西方向に向きを変え、その屈曲部の南側に砂礫台地を形成し、東側には沖積平野が広がっている。この沖積平野が、上流に向けてやや窄まり気味になる部分に面した南側の丘陵上に下モ山古墳群が位置している。

### 歴史的環境

私都川周辺は、水田として利用される農村地帯であるが、近年の各種開発行為等によっ



- |                |             |                |
|----------------|-------------|----------------|
| 1. 下モ山古墳群      | 9. 上峰寺古墳群   | 17. 前田遺跡       |
| 2. 下坂墳丘墓       | 10. 奥山ノ上古墳群 | 18. 奥谷窯跡群      |
| 3. 下坂遺跡(銅鐸出土地) | 11. 口山ノ上古墳群 | 19. 下坂窯跡群      |
| 4. 山田遺跡        | 12. 山田古墳群   | 20. 山田窯跡群      |
| 5. 山ノ上通山遺跡     | 13. 花原古墳群   | 21. 花原窯跡群      |
| 6. 稲荷古墳群       | 14. 山路古墳群   | 22. 山路窯跡群      |
| 7. 宮谷古墳群       | 15. 大坪古墳群   | 23. 離波窯跡群      |
| 8. 下峰寺古墳群      | 16. 延命寺古墳群  | 24. 美帝奴神社(式内社) |

第2図 郡家町北東部遺跡分布図

て大きく変貌しつつある。またこれらに伴う事前調査によって貴重な遺跡が発見・発掘され、八頭郡内でも遺跡の密度の高い地域となっている。

私都川流域においては、縄文時代の遺跡は確認されておらず、弥生時代後期になって初めて先人の痕跡が認められてくる。下モ山古墳群の西方に展開する山田遺跡や、製錬炉・銅鐸の出土地として知られる下坂遺跡が見られる。また、下坂遺跡の西側には、弥生時代後期後半に営まれた下坂墳丘墓が立地している。これらの弥生時代の遺跡は、私都川によって形成された段丘上あるいは、それに面した丘陵の突端部に展開している。これらのこととは、私都川周辺の肥沃な沖積低地に営んだ水田耕作を、生産基盤とした農耕集落の存在

が窺われる。

古墳時代以降、私都川流域を中心として遺跡の数は増加してくる。下坂墳丘墓に代表される弥生時代後期の墓制に続く古墳時代前期の古墳として、郡家町内では初見例となる下モ山古墳群が出現する。また、この時期の土器の散布が認められる山田遺跡の存在が知られる。古墳時代中期になると、近年発掘調査がなされた山ノ上通山遺跡が知られる。遺跡内の山ノ上32号墳より、5世紀初頭の所産と考えられる須恵器樽形罐を出土している。また、同遺跡内の山ノ上24・26号墳の造営が認められる。これに続くと思われる遺跡に稻荷古墳群が見られる。同古墳群より5世紀後半代の須恵器の出土が知られ、出土古墳は不明だが「四神四獸鏡」の倭鏡が確認されている。倭鏡は、4世紀後半代の特徴をもつが、古墳群の年代は5世紀末から6世紀初頭が考えられている。これらのことと、この時期の有力な氏族集団の存在が、私都川中流域においても想定される。

古墳時代後期に入ると、遺跡の数は飛躍的に増加し、郡家町内で25ヵ所の古墳群が認められ、約500基の古墳が認められる。古墳群の分布は、私都川下流域両岸の丘陵上、特に右岸の靈石山山麓と私都谷の入口部分の低丘陵上に集中している。下モ山古墳群が立地する私都谷の分布を見ると、入口部より稻荷・下峰寺・上峰寺・山ノ上・奥山ノ上・山田・山路・花原・延命寺・下津黒等の各古墳群が散在する。これらの古墳群は、2～54基の小群を形成し、ほとんどが円墳である。中でも大坪・山路・山田古墳群は30～54基の古墳が密集する。私都川流域においては、山路1号墳(27m)・山路3号墳(20m)・大坪4号墳(24m)の3基の前方後円墳が確認されている。これら小型の前方後円墳は、全て山田遺跡を見渡す事の出来る低丘陵の突端部に造られている。これらの古墳群と私都川を挟んで対峙する山ノ上・奥山ノ上・上峰寺・下峰寺古墳群でも約56余基の古墳が点在している。この両地域は、私都川が南西にその流れを変え、谷平野が急に開けてくる要所にあたる。靈石山山麓に展開する古墳群の規模には及ばないが、大坪地区を中心とした地域は私都川中流域における中心地であったといえる。

古墳時代後期における古墳の埋葬施設として、横穴式石室があげられる。町内における横穴式石室は、鳥取県東部でも特に千代川以東に通有な、玄室天井部の一部を一段高く架構する「中高式天井」の構造をもっている。横穴式石室を埋葬主体とする古墳は、靈石山山麓に多く認められるが、私都谷においても若干見られる。下坂・下峰寺・上峰寺・奥山ノ上・篠波・下津黒各古墳群中に1～3基が確認されている。

古墳時代終末期より奈良時代に入っても依然として古墳の造営は続くが、この時期より私都川中・下流域に面した丘陵部に須恵器窯が築かれてくる。窯跡は、下流部より奥谷・下坂・山田・花原・山路・山ノ上・篠波・福地地区に1～30余基の須恵器窯が所在している。これらの各地区の窯跡群を総じて私都古窯跡群と呼称されている。この私都古窯跡群

の操業時期は、出土遺物の年代観より6世紀代から12世紀初頭まで続くが、その盛期は8～9世紀である。このことは、私都川流域において水田耕作を生産基盤としていた集団のみならず、須恵器生産に従事した須恵器工人集団の存在が十分に考えられる。山ノ上通山遺跡では掘立柱建物跡群が確認されており、私都川流域で生産された須恵器の集荷・搬出を管掌していた集落と考えられる。

このように、下モ山古墳群が立地する私都川流域は古墳時代以降、政治・経済はもとより文化的にも重要な地域となっていたことが窺われる。

### 第3章 調査の概要

調査に際し、以下の調査方針を立て実施することとした。

今回調査を行った下モ山古墳群は、試掘調査の結果、埋葬施設1基と周溝状の掘り込みを確認していた。この為、発掘調査は古墳築造に関する全面積を対象とし、築造に伴う他の遺構の存在を考慮して最大限広範囲を調査することとした。

調査の結果、当該地区に2基の古墳を確認した。古墳は、地山整形のみもしくは若干の盛土を行って作られた台状墓であることが判明した。夫々の古墳には1基づつ埋葬施設が作られ、木棺墓であることが知られた。出土遺物は1号墳の埋葬施設内より勾玉とガラス小玉各1個が検出されたのみで、古墳の年代観を示す土器類の出土は見られなかった。

#### 第1節 検出した遺構

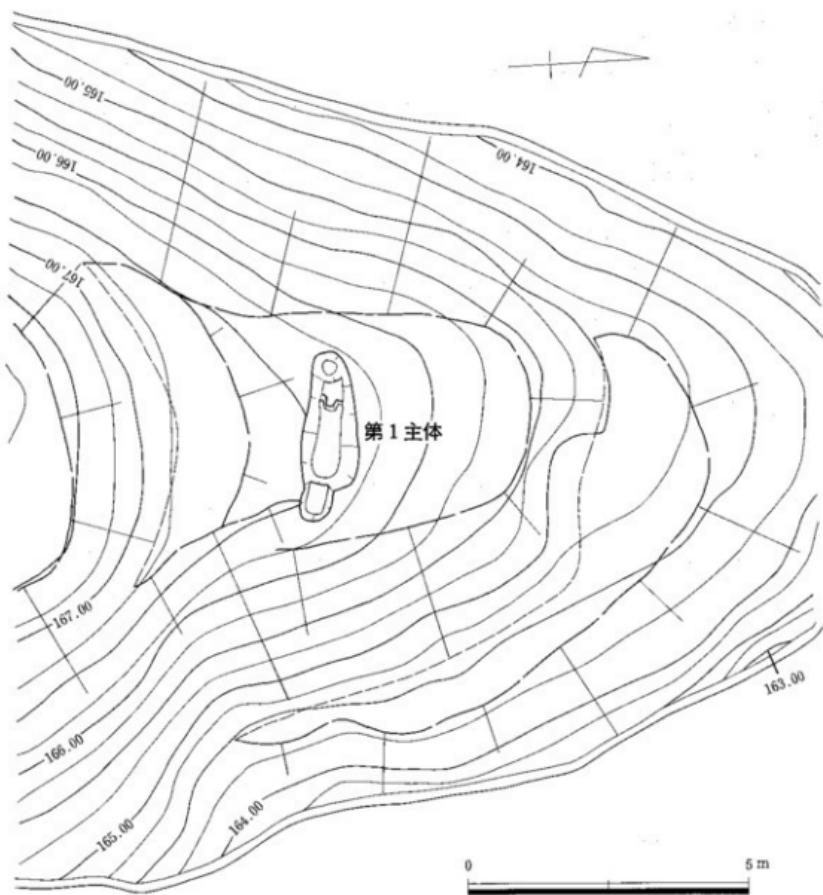
今回の調査では、当初、古墳1基と想定していたが前述のごとく2基の台状墓を確認するに至った。調査区の北側に位置する1号墳は、テラス状に張り出し盛土を施さない台状墓であることが確認できた。1号墳の南側に隣接する2号墳は、やや南北に長い長方形の墳形をとっていた。1号墳の埋葬施設は、丘陵の尾根軸線に直行して作られているのに対し、2号墳のそれは平行に設けられていた。2号墳の南側には、尾根軸線に直行する堀割り状の周溝が設けられているが、1・2号墳の境界は明確ではない。1・2号墳とも墳丘の周囲には、周溝が設けられていなかったが、墳丘基底部を為すと思われるテラス状の平坦部が作られていた。

##### 1. 下モ山1号墳（第3～7図、図版2・3・7～9）

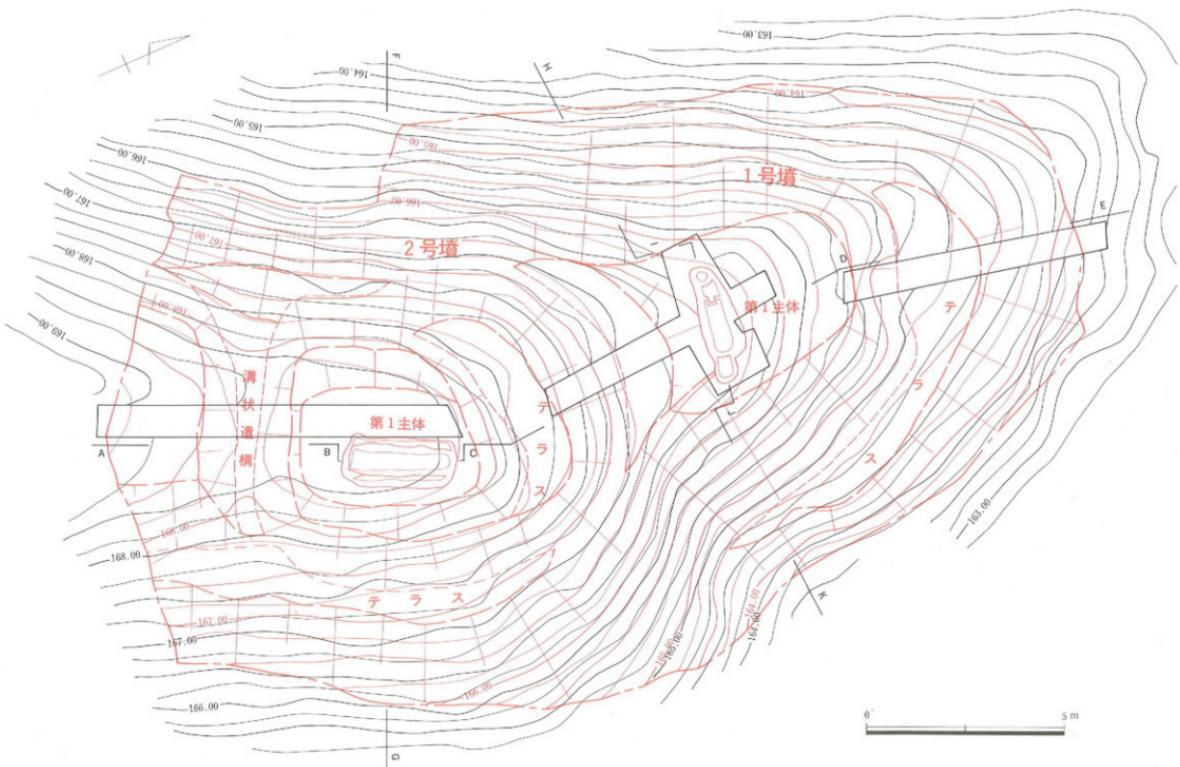
調査前の現況は、南側に隣接する2号墳の位置する狭長な平坦部より、一段低くなつて舌状でやや緩やかな傾斜のテラス状を為していた。明確な墳頂部平坦面は認められなかつたが、東側斜面部において墳丘基底部を形成した痕跡と見られる狭い幅のテラス状の平坦

面が北側に延びていることが知られた。

調査は、尾根軸線の試掘トレンチに沿って南北に土層観察用ベルトを設定し、これに直交して東西の墳丘横断面観察ベルトも設けた。埋葬施設は、試掘調査において完掘していくので他の遺構確認に努めた。頂部および墳丘斜面では、現地表面化15~30cmで地山（岩盤）を検出し、いわゆる墳丘盛土は施されていなかった。

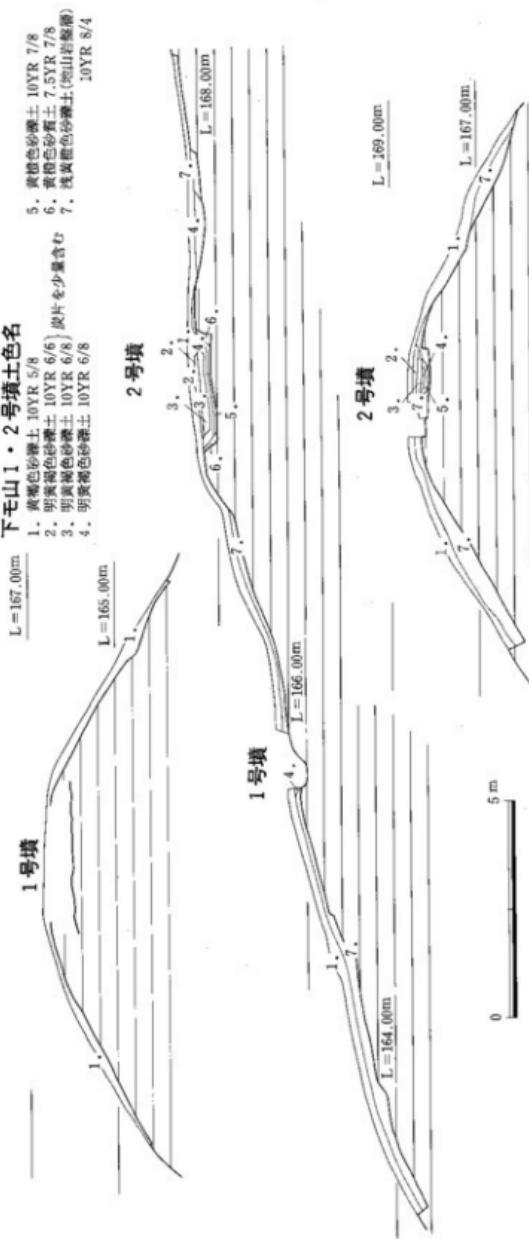


第3図 下毛山1号墳、墳丘遺存図



第4図 下毛山1・2号墳、遺構配置図

第5圖 下七山1・2号墳、墳丘断面図

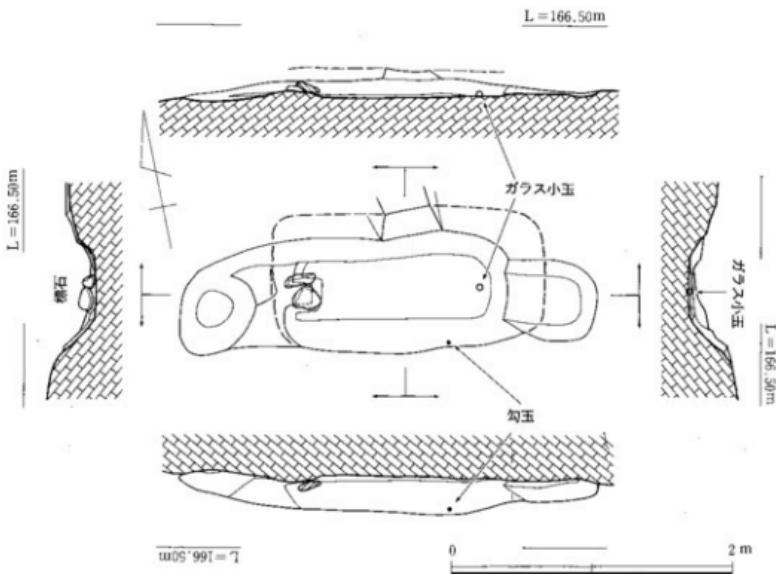


**墳丘** 2号墳の北側の墳裾に接して位置し、半円形のテラス状の平坦面を墳頂部と為す。2号墳との墳裾には溝を伴っておらず、明確な境界を為していない。墳丘斜面の北側と東側には0.6~1.0mの平坦面が廻り、墳丘基底部を為していると思われる。墳丘の北側の一部に構成のカット面が見られるが、墳形の基本形は半円形を為すテラス状の台状墓を呈していたと思われる。この場合、墳丘の規模は東西7.0m、南北6.0m、東側の墳丘基底部よりの高さ約2.0mを測る。

**埋葬施設** 1号墳に伴う埋葬施設としては、1基の木棺直葬墓を検出した。

(1) 第1主体(第6図、図版3・7)

墳頂部平坦面の中央部において、尾根軸線に直交して木棺直葬墓が営まれていた。墓壙の規模は、長軸180cm(推定)、短軸105cm、検出面よりの深さは31cmを測る。墓壙平面は隅丸長方形を呈していたものと考えられ、主軸方位は東西方向をとるN-79°-Wである。南北それぞれの長側壁はやや広がり気味に立ち上がり、横断面は逆台形を呈する。これに対し東西小口側は、土壤に切られており詳細は不明である。墓壙の底面は不整な隅丸長方形を呈している。西側小口部の底面は凸状を為しており、両側に溝が作られていた。この溝



第6図 下毛山1号墳、第1主体遺構図

は、木棺の長側板を埋め込んだと思われる。溝は、小口部より14~15cm突出しており、幅は5~12cmを測る。溝の幅から見て、棺材の厚さは5cm前後と考えられる。東西の小口部には、所謂小口板用の掘り込みは見られない。

墓壙底の規模は、東西小口間の距離は120cmを測る。小口間の内法は110cm前後と推測される。木棺は組合せ式で、規模は長辺130cm、短辺42~55cm、高さ31~40cm前後程度と推定される。墓壙底の標高は165.99mである。両側板の間隔は、東側に向かって開く傾向があり、底面も僅かであるが東側に高いことから見て頭位は東であったと考えられる。

墓壙底の西側小口部において2個の川原石が検出された。この川原石は、長側板に挟まれた位置で出土しており、標石であった可能性が考えられる。

**出土遺物** 墓壙底の東側の床面直上からは、ガラス小玉1個の出土を見た。また、南側の側壁部においては、検出面より玉顕製の勾玉1個を出土した。

#### 小玉（第7図-1、図版1）

小玉はガラス製である。長さ0.21cm、外径0.54~0.56cmを測り、やや薄緑掛かった青色を呈する。重量は85.5mgを測る。

#### 勾玉（第7図-2、図版1）

勾玉の表面は、油脂光沢を呈し玉顕製と思われる。長さ1.85cm、体部中央部の外径は約0.50~0.96cmを測り、黄茶色を呈する。頭部から尾部に掛けてやや先細り気味に作られ、全体に扁平である。頭部の孔は、片面穿孔であるが、最終段階で側面が剝離しているため窪みを有する。重量は1.04gを測る。

#### 標石（第7図-3・4、図版1）

第1主体西側小口部で検出された。3は北側の標石で長さ21.5cm、中央部幅11.1cm、厚さ7.20cm、重量2.09kgを測り、材質は安山岩である。4は南側の標石で長さ21.0cm、最大幅18.8cm、厚さ6.10cm、重量3.76kgを測り、材質は安山岩である。

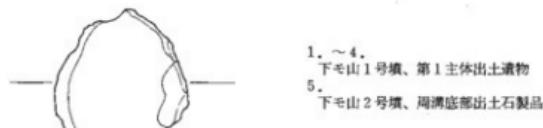
## 2. 下モ山2号墳（第3・4・8・9図、図版2・4~6・8・9）

調査前、試掘トレンチに於いて溝状遺構を確認していたが、顯著な墳丘を形成していなかったため古墳とは確定できなかった。本調査時に拔開を行ったところ、トレンチで確認していた溝状遺構の両側に窪地状の地形が観察された。また、この窪地に連続してテラス状の平坦面が東側斜面部において南北に延びていることが知られ、墳丘基底部を為すものと思われた。

調査にあたり、尾根軸線の試掘トレンチに沿って南北の土層観察用ベルトを、墳頂部に東西の墳丘断面観察ベルトを設定した。調査は、試掘調査で埋葬施設が確認し得なかった為、遺構確認に努めた。墳頂部及び墳丘斜面では、現地表下10~20cmで遺構面を検出し、



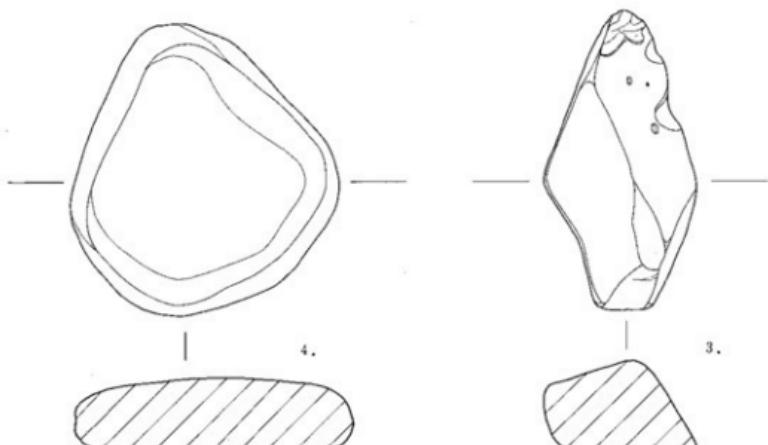
0 5 cm



1. ~ 4.  
下毛山 1 号墳、第 1 主体出土遺物  
5.  
下毛山 2 号墳、周溝底部出土石製品

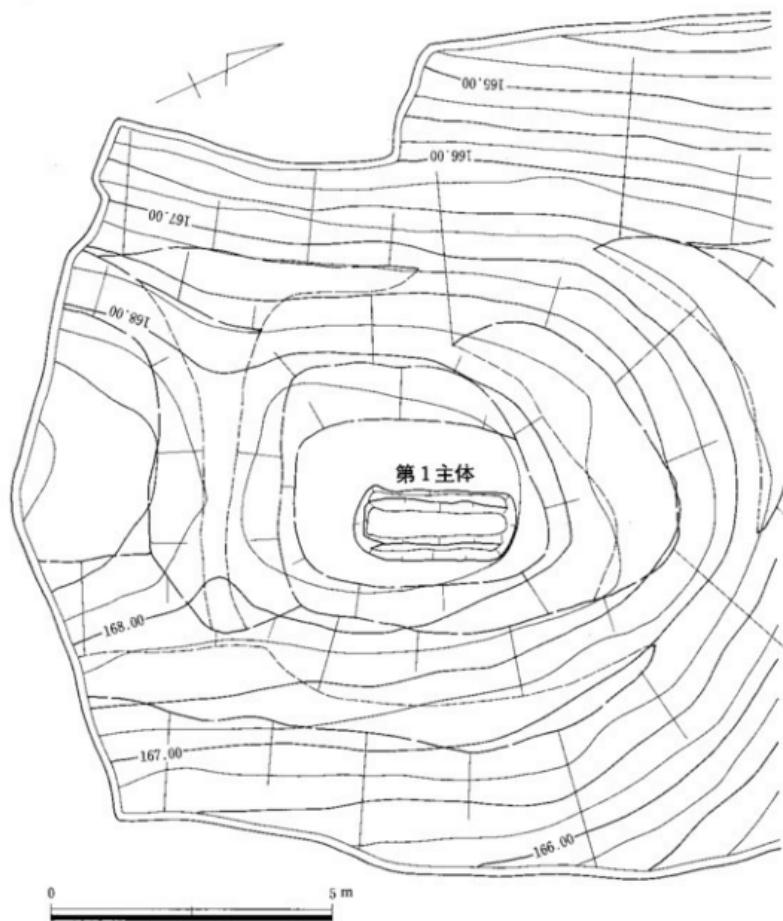


0 10 cm



0 20 cm

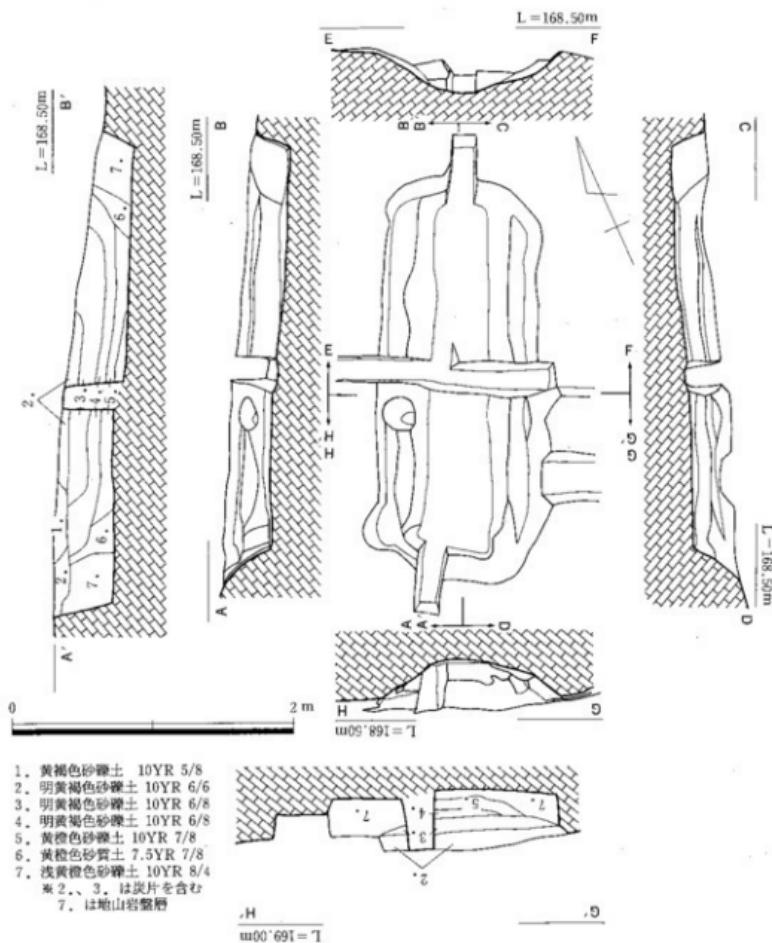
第 7 図 下毛山 1・2 号墳、出土遺物実測図



第8図 下モ山2号墳、墳丘遺存図

若干の墳丘盛土が確認できた。

**墳丘** 1号墳の南側に隣接して位置する。墳丘の北側に4.3×1.0mの半月状のテラスが設けられている。このテラスとほぼ同レベルで、墳丘の東側斜面に南北に延びる平坦部が廻っている。この平坦部は南北8m、幅0.7~1.0mを測り、調査区域外の南側に連続して延びている。墳丘の南側には、尾根を分断して堀割り状の溝が作られている。溝は、上



第9図 下モ山2号墳、第1主体遺構図

端幅1.85m、底部幅0.4~1.9m、長さ約4mを測る。溝の南側は平坦面を有しており、2号墳と同様な遺構が存在する可能性が考えられる。墳丘北側のテラス状の平坦部に於いては、遺構の存在は認められなかった。墳形の基本形は、方形を基調とした台状墓と考えられる。この場合、墳丘の規模は東西約6.0m（テラス部外縁までは6.9m）、南北約7.5m（周溝外縁までは8.7m）、高さは約1.3~1.8mを測る。

**埋葬施設** 2号墳に伴う埋葬施設として、墳頂部で1基の木棺直葬墓を検出した。

(1) 第1主体(第9図、図版3・5・7・8)

第1主体は、尾根軸線に平行して造られた木棺直葬墓で、墳頂部平坦面中央部のやや東側に偏して位置する。墓壙掘り形の規模は、長軸2.89m、短軸1.35m、横出面よりの深さ約0.41mを測る。墓壙掘り形の平面形は隅丸長方形を呈する。墓壙掘り形の長軸の側壁にはテラスを有している。東側のテラスは、幅10~15cmを測り、長さは2.35mである。西側のそれは、幅10~18cmで長さは2.35mを測る。両端部は、いずれも小口側まで回っていない。墓壙の主軸方位はN-26°-Eである。東西の長側壁は、やや広がり気味に立ち上がり、横断面は逆台形を呈する。墓壙の底面は、狭長な隅丸長方形を基調とし、北側の小口部は、やや半円形を呈する。南側の小口部は両端に小口板を埋め込むための割り込みが施されている。この割り込みから見て、棺材の厚さは約5cm内外と考えられる。

墓壙底の規模は、南北小口間の距離2.46mを測り、小口間の内法は約2.30m内外と思われる。木棺は組合せ式で、北側小口部は小口板を長側板で挟み込んだものと考えられる。これに対し、南側では長側板の端面に小口板を当てている。この為、側壁に割り込みの溝が施されたものと考えられる。木棺の規模は、長辺約2.35m、短辺0.36~0.47mを測り、南側小口板の長さは約0.52mである。木棺の深さは、0.35m内外と推定される。墓壙底の標高は168.05mである。両側板の間隔は北側に向かって狭まる傾向にあり、底面も南側が高位に造られている。また、南側の小口板の設置方法から見ても、頭位は南を向いていたものと考えられる。

本墳からは出土遺物は見られなかったが、南側の周溝底部より磨面を有した用途不明の石製品(第7図-5)を出土した。

## 第4章 まとめにかえて

今回、下モ山古墳群の調査によって、2基の古墳(台状墓)を確認した。これらの古墳(台状墓)の内部主体として、木棺直葬墓を検出した。1号墳の主体より勾玉1、ガラス小玉1の出土を見たが、築造年代を知る手がかりとなる土器類の副葬・供獻等は確認できなかった。墳丘築造に関する関連遺構として、堀削り状の溝、墳丘基底部を為すと考えられるテラス状の平坦面等を確認した。

以下、個々の古墳(台状墓)の概略を述べてまとめにかえたい。

**1号墳** 古墳群のもっとも北側に位置し、2号墳が南側に隣接する。墳丘基底部の標高は164.50mを測り、墳頂部は166.50mであった。墳丘は、盛土を施さず地山整形のみで築造され、規模は南北7.0m、東西6.0mを測る。墳丘の平面形は、やや長方形気味の台形を

呈していた。墳頂部の中央部において、木棺墓を主体とする埋葬施設を検出した。木棺は組合せ式で、小口部の一端を開放させた梯子型を呈していた。墓壙底部は、棺材を固定・安定化させるために、開放させた小口部のみ溝状の掘り込みを設けていた。墓壙の規模は長軸約1.80m、短軸約1.05m、深さ約0.31mであった。この墓壙掘り形の底部に木棺が埋置され、その規模は側辺約1.30m、小口幅約0.42～0.55m、深さ約0.31～0.40mを測る。

本墳より出土した遺物は、墓壙内より勾玉1・ガラス小玉1を検出したのみであった。勾玉は、墓壙掘り形の検出面直下で出土していることから見て、棺外の供獻遺物と考えられる。これに対しガラス小玉は、墓壙底の東側に於いて検出された。本主体に埋葬された被葬者は、東側が頭位と考えられることから頸部付近に装着されていたものと思われる。西側小口部で検出された2個の川原石は、石枕と考えられなくもないが一応標石としての性格を持っていたものと考えておきたい。

**2号墳** 1号墳の南側に隣接して位置する。墳丘基底部の標高は166.75～167.25mを測り、墳頂部は約168.30mであった。墳丘は、若干の盛土が認められたが、基本的には殆ど地山整形のみで築造されたものと考えられ、規模は南北約9.0m、東西約7.0mを測る。墳丘の平面形は、方形プランを基調としたやや長方形気味の台状墓と考えられる。本墳の埋葬施設は、墳頂部中央部のやや東側に偏した位置で1基の木棺直葬墓を確認した。墓壙掘り形は、隅丸長方形を呈し二段掘り墓壙であった。墓壙の規模は、長軸約2.90m、短軸約1.35m、深さ0.41mであった。墓壙底には、長辺約2.35m、短辺約0.36～0.47m、深さ約0.35mを測る木棺が埋置されていたものと考えられる。本墳に伴う供獻遺物は確認できなかった。

このように下モ山古墳群の調査では、2基の古墳（台状墓）を確認できた。個々の古墳ではそれぞれ1基の埋葬施設が営まれていたが、主軸方位は異なる方向を示していた。これは1号墳では、その立地上制約を受けたためと思われる。2号墳では、第1主体の西側に埋葬施設を造営するスペースを予め設定していたのではなかろうか。

1号墳では、勾玉・ガラス小玉の供獻形態が見られた。これに対し2号墳に於いては、何ら遺物の供獻は見られなかった。また、埋葬施設の形態でも、夫々に掘り形の差異が認められることから、被葬者の出自の差を反映しているものと考えられる。

さて、本古墳（台状墓）群の築造時期であるが、年代を類推すべき土器の出土が見られない現段階では年代不詳と謂わざるを得ない。しかしながら、1・2号墳の墳丘は、若干の盛土が認められるものの、殆ど地山削り出しのみで造られており、古墳出現期の古墳の築造法に酷似している。同様な築造法をとる古墳として、本古墳群の北西約2.5kmに位置する山ノ上24・26号墳があげられる。両古墳共に地山削り出しによって築造されており、遺物を伴わなかった点で下モ山古墳群と共に通している。ただ山ノ上24・26号墳は、両古墳が

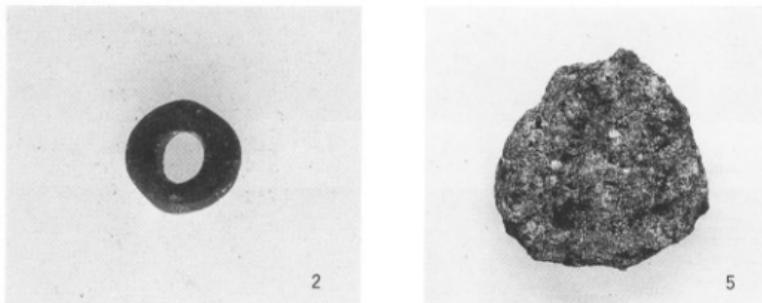
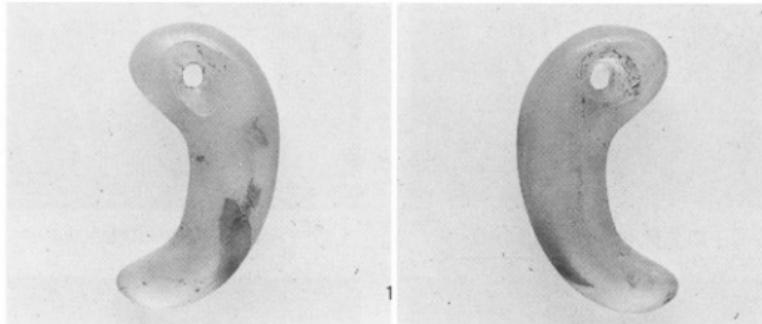
所属する山ノ上古墳群の年代観から考えて、5世紀代の年代を与えている。

下モ山古墳群の築造時期については判然としないが、概ね弥生時代終末期から古墳時代前期初頭の、所謂「古墳出現期」の古墳と考えて大過ないものと思われる。

また、私都川周辺地域に於いて、同種の遺跡や弥生時代の墓制の確認例が増加するものと考えられるが、本例と共に今後の課題としたい。

# 図 版

下毛山1・2号噴出物遺物



## 図版 2

### 下毛山古墳群



[1] 調査地遠景（北東より）



[3] 1号墳、遺構面検出状態（南より）



[2] 試掘調査風景



[4] 1号墳、遺構面検出状態（東より）



[6] 1号墳、調査前全景（南より）



[5] 2号墳、溝状遺構検出状態（南より）



[7] 2号墳、調査前全景（南より）



[8] 1・2号墳、表土除去状態（南より）

下毛山1号墳



〔1〕第1主体検出状態（北より）



〔2〕第1主体、標石検出状態（東より）



〔3〕第1主体、西側小口部検出状態（西より）



〔4〕墳丘北側テラス検出状態（北より）



〔5〕墳丘東側テラス検出状態（北より）



〔6〕墳丘東側テラス検出状態（南東より）



〔7〕墳丘北側テラス検出状態（西より）



〔8〕墳丘北東側テラス検出状態（南東より）

図版4

下毛山2号墳



[1] 第1主体検出状態（南より）



[2] 第1主体遺構面検出状態（南より）



[3] 第1主体、埋土土層断面（北より）



[4] 第1主体、埋土土層断面（東より）



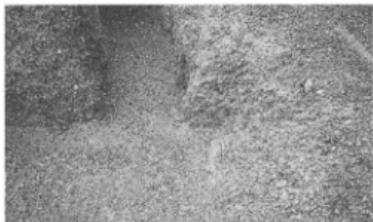
[5] 第1主体南側、埋土土層断面（東より）



[6] 第1主体北側、埋土土層（東より）



[7] 第1主体、南側小口部検出状態（北より）



[8] 第1主体、南西側小口部検出状態（北より）

下毛山 2 号墳



〔1〕 墓丘東側テラス検出状態（北東より）



〔2〕 墓丘東側テラス検出状態（南より）



〔3〕 墓丘南側、周溝検出状態（南より）



〔4〕 周溝・堆丘基底部検出状態（東より）

図版 6

下毛山 2号墳



[1] 墳丘遺存状態（北より）

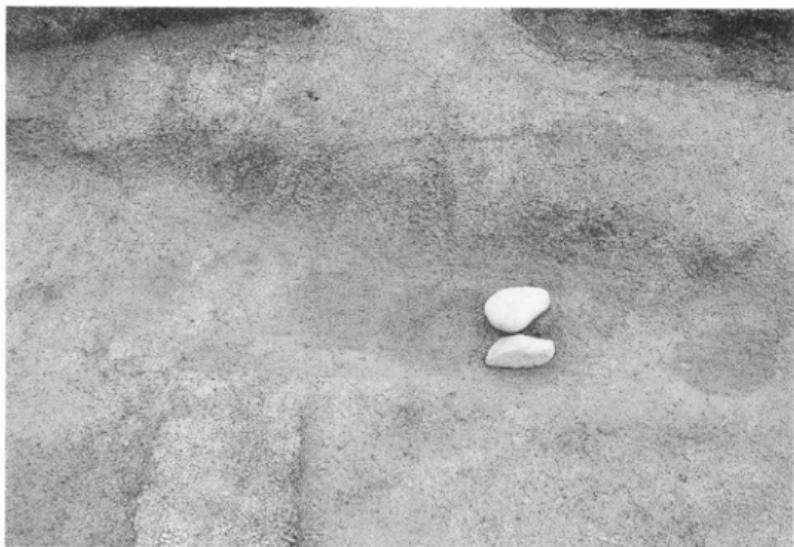


[2] 墳頂部遺存状態（南より）

下毛山 1号墳



[1] 墳丘遺存状態（北より）



[2] 第1主体検出状態（北より）

図版 8

下毛山1・2号墳



[1] 1・2号墳全景（北より）



[2] 2号墳、第1主体検出状態（南より）

下モ山1・2号墳



[1] 1・2号墳、調査後全景（南より）



[2] 2号墳、周溝全景（南より）

# 報告書抄録

ふりがな	しもやまこふんぐんはくつちょうさほうこくしょ						
書名	下モ山古墳群発掘調査報告書						
副書名							
巻次							
シリーズ名	郡家町文化財調査報告書						
シリーズ番	21						
編著者名	中野 知照						
編集機関	郡家町教育委員会						
所在地	〒680-0463 鳥取県八頭郡郡家町宮谷80番地 TEL(0858)76-0001						
発行年月日	西暦 1998年3月31日						
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
しもやま 下モ山 こふんぐん 古墳群	こうげちょう 郡家町 おおあざべふ 大字別府 おぎしもやま 字下モ山	31321	35° 25' 8"	134° 18' 5"	1997.10.06 ～ 1997.12.10	350m <sup>2</sup>	民間業者による土砂採取に伴う調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
下モ山 古墳群	古墳	古墳時代前期	木棺墓 周溝	2 1	ガラス小玉 勾玉 標石		

---

**下毛山古墳群  
発掘調査報告書**

平成 10 年 3 月 印刷・発行

発行 郡家町教育委員会  
印刷 中央印刷株式会社

---